AACK 京都大学学士山岳会 No.116

Newsletter

October 2026

http://www.aack.info

目　次

マサコン初登頂 40 周年特集

報告：マサコンから 40 年：ブータン研究の軌跡と展望
竹田晋也 1

マサコン 40 周年
高井正成 4

マサコン 40 年ーブータンからインド、ネパールを旅してー
伊藤宏範 5

マサコン登頂 40 周年の今日このごろ
中山茂樹 7

マサコンから 40 年、思い出すこと
横山宏太郎.....8

図書紹介

「主要電源としての自然エネルギー」
西山孝、原田道雄、伊藤宏範、荻原宏章著
永田 龍.....12

事務局だより 13

編集後記 14

マサコン初登頂 40 周年特集

報告：マサコンから 40 年：ブータン研究の軌跡と展望

竹田晋也

はじめに：マサコン初登頂と 40 年の歩み

2025 年 10 月 13 日、京都大学総合研究 2 号館 4 階大会議室においてヒマラヤ研究ユニット主催の研究会「マサコンから 40 年：ブータン研究の軌跡と展望」が開催された。ちょうど 40 年前の 1985 年 10 月 13 日は、京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊がマサコン（7200 m）の初登頂に成功した日である。

研究会の冒頭では、40 年前の登山隊メンバーである栗田靖之、横山宏太郎、松林公蔵、伊藤宏範、高井正成らが紹介された。マサコン登頂の前後には、プラザ合意（1985 年 9 月）による急激な円高の進行や、日本とブータンの国交樹立（1986 年）など、振り返れば歴史的な転換点となる出来事が重なっていた。それから 40 年を経て、京都大学のブータン研究は、若い世代へと確実に受け継がれ、さらなる深化と広がりを見せている。本研究会は、この 40 年間の軌跡を多角的に検証し、次世代に向けた新たな研究テーマと役割を展望することを目的に、会場とオンラインを合わせて開催された。

第 1 部：臨地研究の最前線―若手研究者が捉える変容の現場

第 1 部では、ブータンで長期フィールドワークを実践している 5 名の若手研究者から、多角的な報告があった。

平山貴一（京都大学医学研究科）は、「フィールドから紡ぐブータンの地域ケア」と題し、東ブータンの農村における障がい者支援の実践を

報告した。医師として現地に滞在した平山は、重度の障がい児を抱えるシングルマザーや、介護のために学業を断念した16歳のヤングケアラーの少女といった「表に出てこない」困難を抱える家庭を可視化するため、村役場や診療所、学校を巻き込んだ「コミュニティサポートミーティング（地域ケア会議）」を設立した。この会議を通じて、屋内トイレの建設や、寮併設校への転校支援といった具体的な解決策が導き出された事例は、専門家が不在な地域におけるコミュニティのレジリエンス（回復力）を高める草の根活動の有効性を示した。

続いて、生駒忠大（JICA専門家）は、東ブータンの有畜農業の劇的な変容を報告した。かつてのブータン農業の象徴であった「耕牛による犁耕」が、2021年頃を境に急速に姿を消し、手押し耕耘機へと置き換わっている実態が明らかにされた。生駒は、かつて耕牛を繋いでいた「くびき」が薪として燃やされている光景を紹介し、若者の村外流出による労働力不足や、キヌアなどの新たな換金作物の導入が、伝統的な農・牧複合の循環系を解体させつつある現状を鋭く分析した。

森下航平（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）は、農村部の小規模校における「複式学級」での学習指導の実態に焦点を当てた。教育の量的拡大を支えてきた複式学級だが、近年の学校統廃合により岐路に立たされている。森下は、現場の若手教員がICT機器や「ガイド学習（上級生が下級生を教える）」、さらにはAIやSNSを駆使して、大学で学んでいない複式指導の困難を乗り越えようと奮闘している姿を描き出した。

菊川翔太（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）は、視点を国外へ移し、オーストラリアのパースにおけるブータン人移民コミュニティとサッカーリーグの関係を論じた。近年、ブータンでは「爆発的」とも言える海外移住が起きており、パースには1万2000人以上のブータン人が居住している。菊川は、サッカーが単なる娯楽を超え、元代表選手のセカンドキャリアの場や、起業家によるスポンサー活動を通じて、脱領域化したブータン人のアイデンティティを再構築する重要な社会空間となっている実態を報告した。

第1部の最後として、石内良季（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）は、1950年代の文書や聞き取りに基づき、東ブータンの歴史的な移住と納税者階級について発表した。第3代国王の時代に行われた税制改革以前、重税や感染症から逃れて移動していた人々を、王室が「スマ」という低負担の納税者階級として再定住させた歴史を解明した。これは、現在のガムリ川流域の人口構成の履歴を探る上で、重要な知見である。

第2部：研究の伝統と「フィールド医学」の展開

第2部では、ヒマラヤ研究を牽引してきたフィールド研究者による講演が行われた。

月原敏博（福井大学）は、「グローバル研究としてのブータン研究」と題し、京都の「登山・探検学派」が築いた伝統を振り返った。1950年代のマナスル登山隊や中尾佐助による1958年のブータン調査に遡り、彼らの研究が単なる地域研究（エリアスタディ）を超え、広域的・多層的かつマルチスケールな視程を持つ「グローバル研究」の先駆けであったことを指摘した。その視点は中尾の「照葉樹林文化論」やその後の「高地文明論」へと結実していったのである。

坂本龍太（京都大学東南アジア地域研究研究所）は、マサコン登山隊以降の「フィールド医学」の展開を詳述した。2025年に逝去された奥宮清人と河合明宣の功績を振り返りつつ、高地特有の生活習慣病対策としての「カリン診療所」の活動や、JICAプロジェクトを通じた人材育成の成果を紹介した。坂本は、先達が築いたブータンとの「細く長い」絆が、現在の若手研究者たちの活躍の礎となっていることを強調した。

総合討論：これからの40年に向けて

藤倉達郎（京都大学・ヒマラヤ研究ユニット長）と宮本万里（慶應義塾大学）の司会のもと

行われた総合討論では、会場とオンラインでブータン、オランダ、エチオピア、オーストラリアなどを結び、国境を越えた議論が展開された。

冒頭、会場の先達にコメントが求められた。栗田靖之（国立民族学博物館名誉教授）は、近年のブータン人による大規模な海外移住という深刻な現状に強い懸念を示した。年間の出国者が全人口の 2% に達し、若者の 9 割以上が海外移住を希望しているというデータに触れ、「これからの 40 年のブータン研究は、国を出た若者たちの『不平不満や不安』に耳を傾けることが重要な鍵になる」と説いた。続いて安藤和雄（京都大学東南アジア地域研究研究所）は、「まず友達になり、細く長く付き合う」という姿勢を強調しつつも、ブータン国内の経済的・民族的な格差といった、歴史的に語られてこなかった「影」の部分にも光を当てるべきであると指摘した。

これらの発言を受け、オランダから Zoom で参加した宮本は、ブータンを「孤立した国家」ではなく、グローバルな人的流動性の中に位置づけ直す重要性を論じた。特に、近年の国外流出に対し、王室や政府が「デプス」や「ギャルス」といった国民統合プロジェクトでいかに対応しているかという、統治の最前線を捉える視座を提示した。

さらに議論は、京都大学とブータンの関わりが 1985 年のマサコン以前にまで遡る履歴を持つことに及んだ。オンラインで参加した上田豊（名古屋大学名誉教授）は､1968 年の小野寺隊（ブータン・ヒマラヤ学術探検隊）に言及した。インドが外交を握り完全な「鎖国」状態であった当時、ニューデリーで半年間粘った末にわずか 1 週間の入国しか許可されなかったというエピソードが語られた。上田は、その 30 年後に氷河湖決壊洪水（GLOF）のリスク調査という新たな課題を携えて再びブータンに向き合った。この科学的調査を通じて、ついに念願の高山帯への入域を果たし、長年の夢を実現させたのである。この継続的な関心と、地球環境問題という現代的な文脈での再訪が、現在の共同研究へと繋がっている事実は非常に示唆的である。

この「未知なる高地」への情熱は、つづく世代にも受け継がれていた。河合明宣は、3 回生という早い時期に誰よりも早くブータンを目指した人物であった。1971 年当時、河合は 8 ヶ月間インドに滞在しながら入国を試みたものの叶わず、ネパールへと転じた。しかし、ブータン最高峰ガンケルプンツムを目指した若き日の熱量こそが、その後の多様な関係の源流となったのである。こうした登山隊が築いた信頼関係は、後に松沢哲郎や松林公蔵らによって全学的なプラットフォームである「京都大学ブータン友好プログラム」へも展開された。

おわりに：細く長い絆を次世代へ

40 年前のマサコン登頂は、単なる登山記録としてだけでなく、その後の学術交流につながる出来事であった。本研究会を通じて、ブータンとの「細く長い」絆と人脈が、確実に若手研究者へと継承され、さらに「グローバルな文脈の中のブータン」という新たな地平へと広がっていることが確認された。

しかし、現代のブータンが直面している課題―農業の変容、教育の質の確保、そして何より国民の大規模な国外流出―は、40 年前とは比較にならないほど複雑である。マサコンから 40 年が経過した現在、ブータン研究は、単なる「秘境」への探検を脱し、現地の主体性を尊重しながら、グローバルな課題と地域固有の文脈が交錯する新たな段階に入っている。

今回の研究会では、先達が何十年もかけて築いてきた「細く長い」絆という基盤があってこそ、現在の自由な研究が可能になっていることが再確認された。この絆を大切に守り、次世代の若手研究者たちが「越境するブータン」という新たな地平に挑むことを支えていくことが、マサコン登山を未来へ繋ぐ道であろう。本研究会で示された若手たちの臨場感あふれる知見と、先達たちの洞察は、これからの 40 年を切り拓く指針となっていくはずだ。

（記載の都合上、文中における個人名の敬称は省略させていただきました）

マサコン 40 周年

高井正成（カバマル、1981 年 KUAC 入部）

10 月 13 日はブータンヒマラヤのマサコン峰を初登頂した記念日です。当時のマサコン遠征隊の関係者は、マサコン会と名付けたメーリングリストを通して連絡を取り合って、毎年登頂日の頃に懇親会などを開いてきました。今年は登頂 40 周年ということで、懇親会に加えて「京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊 1983-1985 の研究資源アーカイブ化作業」の経過報告会と、京都大学ヒマラヤ研究ユニットの主催によるブータン研究会を企画しました。経過報告会（10/12）とブータン研究会（10/13）は京都大学吉田キャンパスの総合研究 2 号館で開催し、経過報告会の後に懇親会を開催しました。

これまでマサコン会として連絡を取り合ってきたメンバーは、1984 年の偵察隊と 1985 年の遠征隊の隊員に限られていました。今回の 40 周年では、アーカイブ化作業に協力いただいている 1983 年の踏査隊員や、1982 年にブータン入国を目指してインドに渡ったメンバーにも連絡をとり、報告会や研究会への参加案内を出すことにしました。ルームの関係者で該当したのは 21 人でしたが、残念ながら総隊長だった堀先生、事務局長だった人見ハイガさん、そして踏査隊に参加していた吹田ゲロベーさんの 3 名は逝去されていました。残り 18 人のうち、2 人は連絡先不明で 3 人が都合により不参加でした。最終的に 13 名が報告会・懇親会に参加してくれました。当時の最年少（現役 3 回生）だった隊員も還暦を迎えており、オジサン達の飲み会です。

アーカイブ化作業の経過報告会では、総合博物館講師の五島敏芳先生に作業の進展状況を報告してもらいました。踏査隊、偵察隊、本隊の 3 つの遠征隊員のうち、人見ハイガ、竹田スイッチョン、高井カバマル、伊藤クルンパ、森戸ヤキゲの 5 名が提供してくれたスライド写真、ブータン政府や留守本部とのファックスなどでの連絡の記録、登山隊の装備係や食糧係のリストや資料、隊員の行動記録を記した野帳、そして現役部員が行っていたブータン研究会の資料などがデジタル化されつつあります。また、当時の装備（テント、ピッケル、登山靴、衣服、背負子、カメラなど）なども、貴重な資料として登録されています。講演後には写真の著作権や肖像権などに関する質疑応答がありました。現在の日本の現状では、肖像権に関する問題よりも、写真撮影者の著作権が問題になっているとのことでした。

続いて、当時の登攀隊長だった横山コータローさんがマサコン峰の標高と氷河についての講演をし、最後に月原ベコさんがマサコン峰周辺の地図や衛星画像に関する最近の問題点などを報告してくれました。マサコン峰の標高に関しては、当時から 7200 m ないのではないかという話で、実際には 6800 m 位の高さのようです。また、マサコン峰はブータンと中国の国境に位置しているため、その周辺の国境は非常に入り組んでおり微妙な問題があるようです。我々が登頂したことにより、マサコン峰はブータンの山だという共通認識ができたということでした。当時は何も考えずに、ひたすら山頂を目指して登っていたのですが、今となると政治的な意味も持つようになったようです。月原ベコさんに、世界各地の山の標高を調べるサイト（Peak Map: https://www.peakwiki.org/en） を教示してもらいました。これによると、マサコン峰の標高は 6710 m となっています。国境線の状況もわかりますし、便利なサイトです。

懇親会の会場は聖護院の河道屋養老でしたが、皆さん楽しく雑談をしながら歩いて行きました。懇親会から参加したメンバーも数人いて、最年長の栗田ラーメンさんの挨拶の後、名物の養老鍋をつつきながら各自が近況報告をして、その後はものすごい盛り上がりでした。河道屋の女将さんにも、豪快な飲み方にお褒め（？）のお言葉を頂きました。2 次会には 7 人も参加して、10 時過ぎまで大騒ぎでした。皆さん驚くほど元気でした。だんだん参加者も減っていくでしょうが、50 周年も是非開催したいと思います。

マサコン 40 年
ーブータンからインド、ネパールを旅してー

伊藤宏範

40 年前の 1985 年は忙しい年であった。3 月末にそれまで 2 年勤めた会社を辞めた。4 月から 7 月初めまで中国ナムナニ峰登山隊に参加した。後方隊員も含めると総勢 70 人を超える大部隊であった。日本に帰ってすぐに、ブータン・マサコン峰登山隊に参加することが決まり、出国する 8 月下旬までの 1 か月半の間、準備に追われた。賃貸住宅を出たので、マサコン隊事務局長の人見五郎の部屋に転がり込んだ。

8 月 22 日に大阪空港を飛び立ち、登山活動は 8 月 30 日から 10 月 29 日の 2 か月間で初登頂に成功し、現地スタッフを含め 24 人、無事ティンプーに帰着。11 月 5 日には、パロからカルカッタを経て日本に帰る隊員、陸路プンツォリンからインドへ出る隊員に分かれ、ティンプーを後にした。

ぼくは、登山隊を離れ、のんびりとヒマラヤトレッキングがしたくて陸路でまずインドへ出た。帰りの飛行機はデリーから大阪までのオープンチケットがある。栗田靖之副隊長からは 12 月中旬に隊員会議を開くのでそれまでに戻るようにとの指示があった。登山中のニュースとして阪神の優勝とプラザ合意によりドルレートが 240 円から 200 円へと急速な円高が印象に残っている。日本出発前の 8 月 12 日に日航機の大事故があった。

インドの隣ネパールのカトマンズには山岳部・探検部出身の門田毅が JICA 事務所に滞在しており、そこをめざす。その前にダージリンからカンチェンジュンガ、ヤルンカンを見てみたいと思い、ほかのメンバーに声を掛けると高井正成がのってきた。11 月 6 日、プンツォリンからは、国境のインド・ジャイガオン、バグドグラを経てダージリン着。天候に恵まれず、体調もやや悪く、カンチを眺めることができたのは 12 日朝であった。朝日に輝く大きな峰みねであった。ダージリンからシリグリを経て、出入国管理所のあるカカルビッタでチェック 16 時、夜行バスとなり、いよいよネパールである。カトマンズには翌13日11時になったが、門田邸には本人が帰宅するのに合わせて 16 時着、マサコン隊員が何人も先着していた。ここを拠点にレンタサイクルでカトマンズの街を散策した。エベレスト周辺のトレッキングパーミッション（120 ルピー）が取れたので 19 日カトマンズからルクラへ飛行機（55 ドル）で、帰りは 12 月 1 日ルクラからカトマンズに戻る計画となった。みなとも別れ、ここからは一人旅である。

11 月 19 日快晴→曇

5 時過ぎに門田邸を出てタクシーでカトマンズ空港へ。チェックインが 7 時過ぎであったが、霧がでて搭乗、離陸は 10 時。10 人乗りぐらい。30 分の飛行と短いが、高度が低いので眺めはすばらしい。10 時半ルクラ着。高度 2900 m。ロッジで昼食をとり、11 時半歩き出す。ガート、パクディンマを通り、15 時ベンカール着、2800 m。エベレストロッジで泊まることにする。谷底を歩いているようで遠くの 8000 m峰は見えない。

11 月 20 日快晴→霧

8 時出発。ジョサレを経て、10 時にドゥードコシを渡る橋からは登りとなる。2900 m。11 時過ぎ 3200 m あたりから遠くのエベレスト、ローツェが見え始める。12 時ナムチェ入り口のシェルパホテルに泊まる。チャンがうまい。3400 m。

11 月 21 日快晴

7 時半出発。しばらく行くとエベレスト、ローツェが見え出した。もう少し大きく見えると思っていた。頂上付近では風が強く、煙のような雲を流している。後ろから「こんにちは」と声をかけてくれた日本人が走って追い越していく。サーナサではテレビカメラを持った日本人グループがエベレストＢＣの方向に行った。モンラ 4000 m、ポルツェタン 3600 m を経て、開けたドーレからはクーンビラの山やまが良く見える。13 時半ホテルヒマラヤンドーレで泊まる。4000 m。

11 月 22 日快晴

7 時出発。ここからはずっと 4000 m を超えている。10 時マチェルマ 4400 m、12 時タウジュン 4700 m、13 時ゴーキョ 4700 m。途中でチャイを何杯も飲む。泊まるチョオユーホテルからはその山が良く見える。1 日の食費、チャイ、宿泊代はあわせて 40 から 50 ルピーほど。

11 月 23 日快晴

今日はゴーキョピーク 5250 m への往復。7 時出発。風邪気味で登るのに時間がかかった。9 時半頂上。エベレスト、ローツェ、ヌプツェ、マカルーが良く見え、おなかが一杯になった。午前中は風がなく静かだ。1 時間半ピークにいて、11 時下山開始。走るように下りて 12 時にゴーキョに戻る。

11 月 24 日快晴

8 時出発。13 時ポルンツェ 3800 m、15 時半パンボチェ 3900 m。ひたすら歩く 7 時間であった。パンボチェにはロッジのようなものがない。どの家も鍵がかかっている。トレッキングパーティのテントの横に家があったので入って聞くと、ロッジではないが泊めてくれるという。夕食にはトレッキング隊用のヤク肉のギョーザを出してくれた。

11 月 25 日快晴

昨日の疲れで出発は 9 時。シェルパの女性が 2 人同行することになる。12 時ペリチェ 4200 m、前方にプモリが見えてきて、しばらく行くと、15 時ロブチェロッジ 4800 m。シェルパの 2 人は途中の道からディンボチェへ向かった。

11 月 26 日快晴

今日はカラパタールでエベレストの夕焼けを見る予定だ。出発もゆっくりの 8 時半。10 時半カラパタール登り口のゴラクシェプ 5000 m。ここから 500 m の登りで、12 時半カラパタール到着 5450 m。夕焼けが始まるのは 16 時過ぎ、それまでは持ってきたシュラフに潜り、ぼんやりとエベレストを眺めている。午後は風がないが、寒くなってきた。16 時半、太陽が落ちた。17 時、月が出てきた。エベレストが黄色から赤に変わるのは 10 分ほどだ。写真を撮りまくる。手袋を片方なくしたので左手が冷たい。ここからはエベレストベースキャンプがよく見える。今年は韓国隊が入っている。陽の光のあるうちに下り始めた。17 時半にゴラクシェプに着いたときは真っ暗であった。月が出ているが、まだ下の道には光が届いていない。一度も休まずにロブチェロッジをめざした。19 時帰着。昨日寝たベッドがほかの宿泊者に占領され、荷物も横にやられていた。

11 月 27 日快晴

出発 8 時半。クンブ氷河を振り返りながら、10 時半、ペリチェ手前のせせらぎで顔を洗う。すぐにディンボチェ 4300 m、11 時。マカルー、ローツェ、ローツェシャール、アイランドピークが一望できる。足を延ばし、ビブレ 4500 m を経てチュクン 4600 m まで行き、ここから周囲を眺めて引き返す、12 時。ディンボチェに戻り、アイランドピークビューロッジに泊まる、14 時。次々とトレッカーが現れる。日本人はいない。

11 月 28 日快晴

今日は下りだが長い。出発 7 時半。9 時半、パンボチェ 3900 m。10 時半、タンボチェ 3800 m。12 時、テシンガ 3500 m。14 時、ナムチェ・シェルパホテル 3400 m。途中、4 か所でチャイを飲む。

11 月 29 日快晴

カトマンズ行きの飛行機が 12 月 1 日なので、今日はナムチェ滞在。16 時半ごろ霧がかかり、しばらくすると少しずつ霧が晴れ、タムセルクの双耳峰の右側だけが夕日に照らされて美しい。カメラを持って出なかったのが残念。

11 月 30 日快晴→曇

今日は土曜日、バザール・マーケットの日、出発前 30 分ほど見学。出発 9 時。11 時、ジョサレ・チェックポスト、2800 m。13 時、ファカディン。16 時半、ルクラ・ヒマラヤロッジ、2900 m。

12 月 1 日快晴

7 時半、ルクラ空港着。11 時搭乗、離陸。11 時半、カトマンズ空港。バス 1 時間で街中に到着。15 時、再び門田邸を訪ねる。

半年間の登山で高所順応できていたので、ほぼ2週間順調に行動でき、天気にも恵まれ、充実したトレッキングを終えた。

この後は、12月3日カトマンズから空路でインド・デリーへ、7日までデリー周辺の観光。アグラのタージマハールの見学はホテルの部屋の変更で迎えの人と会えず、行けなかったのが心残りであった（およそ30年後の2013年、デリー出張の帰り、1日ツアーで見ることができ、ようやく念願がかなった）。デリー空港でマサコン隊の菅野公一と偶然再会。インド航空でバンコク、香港を経由し、8日大阪国際空港に到着（まだ関空はなかった）。4か月半ぶりの日本となった。この年は8か月近く、海外にいたことになる。

その後も忙しく、12月14、15日隊員会議、21日にＴＢＳ系列で登山隊の番組がテレビ放映された。1986年1月18、19日には日伊会館で報告会が開かれ、いちおう隊としての活動の締めとなった。

マサコン登頂40周年の今日このごろ

中山茂樹

「あゝ、あれからもう四十年が経つのか」と感慨深いことであるのだけれど、私にとってはその次に思うことに「その間、私はいったい何をやって来たのか？」という気持ちになる。

私とブータンとのかかわりは1983年のルナナ地方をぐるっと回る「スノーマントレック」に参加したことに始まる。どこかひとつ山を決めて登山申請を出すためには、その山域をよく知らなければならない。そこで、まずは山域をトレッキングすることから始めようということで一ヶ月にわたるブータンヒマラヤの周遊トレッキングを行ったのであった。

スノーマントレックというのはヒマラヤツアーを企画、催行する西遊旅行の付けた名称であって、当時外国人が最も長く、そしてブータンヒマラヤのふもとに最も接近できる手段であった。このとき私は生まれて初めて一ヶ月という長期間にわたって電信柱や電線を全く見ない（それらが存在しない）という生活を経験した。山岳部に入って二年生の冬山で、人里から遠く離れて日高山脈に入り、一週間ただただ美しい白銀の峰々を歩いて稜線の反対側の里に下りたときにとてもすごいことを為したようで感動したことをよく覚えているのだけれど、その経験と同様にこの一ヶ月の山旅に私はとても感激した。

このトレッキングが未踏峰登山のための準備であるからにはその次の登山にも参加しなければ意味がない。自ずとそう考えていた。結果的にそれはトレッキングから二年後に未踏峰マサコンへの挑戦という形で実現することになったわけだ。このころ一番熱心に、そして一番時間をかけ一番労力を傾けていたのは富永ババチョであったけれど残念ながらババチョはマサコン隊には参加できなかった。

マサコンの登山許可を取得するまでには栗田ラーメンさんをはじめ、多くの先輩方や関係者の方々にお世話になったが、一番忘れられないことは、桑原武夫先生が手取り足取りブータン王妃やブータン政府への手紙の出し方、書き方を教えてくださったことだ。あらためてここに特筆しておこう。私はババチョについて桑原先生のお宅を何度も訪問し、手紙、申請書などの添削をしていただいたのであった。その都度、桑原先生は何も知らない若造相手にやさしく応対してくださった。

登山中は夢中になって登路を探り、充実した登攀活動の末、初登頂を果たせた。まことに誇らしい登山だったと今振り返ってもそう言える。1958年にチョゴリザ遠征に参加した岩坪ゴローさんが「また来るのだ」と思ったように、私もこのヒマラヤの雄大さに、初登頂のおもしろさに魅せられて「また来るのだ」と思ったのであった。

ヤクを１頭買い上げて、ＢＣではフォンデュにして食ったらしい。私はそのときＣ１に居たのだが脚１本をＢＣから上げてもらった。私たちはまず生の刺身で食し、翌日特製ヤクカレーを作ったりした。同じくＣ１に居た横山コータローさんが、時間をかけて丁寧に煮豚ならぬ

煮ヤクを作ってくれたのだが、これがまた絶品だった（〜食中毒事件も起こったのだけれど〜）。堀隊長は実際の登攀活動はされないので、毎日我々の活動が良く見える場所に移動して見守っておられた。ルートが厳しく思うように進まなくなって難儀していたとき松林マーボーさんが横山コータローさんに「このルートは根本的に考えなおしてみてはどうですか」と進言して隊全体が暗澹たる雰囲気に包まれた。オーバーハングの氷壁を回り込んで雪壁にへばりついて迂回するルートを人見ハイガさんが見つけて、皆怖いルート工作をすることになったけれど、そのおかげで登頂にこぎつけた。登山活動の記憶をたどると懐かしいこころ持ちを味わうのである。

ところで、このルナナ地方のトレッキングとマサコン初登頂は私の海外登山の最初のものであったが、この成功体験によってその後いくつかの山を登ることになった。ムスターグアタの頂上までスキーで上がってアタックキャンプまで滑ったり、シシャパンマの登山隊に参加して8000 m峰登頂を経験したり。しかしながらその後梅里雪山で17人もの山仲間を失うという大事故で私の海外登山は終わるのであった。そうしてみればマサコン初登頂の喜びは、私の中では梅里雪山の悲しみと常にセットで思い出されるものとなってしまった。

そして、セットでしか振り返れない私の海外登山を思うとき「この四十年間、私はいったい何をやって来たのだろう？」と考えてしまうのである。『人生は（出来るか、出来ないか、ではなく）やるか、やらないかだ。』ということが人生の真理だと思うようになるのは随分あとになってからのことでではあるのだが、私はいったい何をやって来ただろう。ヒマラヤの未踏峰に初めて登る経験をして、一方で多くの山仲間を未踏の山で失って生き残っている私は、この四十年間に何をやったのだろう。海外登山の愉しさを後輩に伝えることも、若くして亡くなったみんなの分まで生きていくことも、なんにもやって来られなかった。そういう悔恨のかたまりが私につきまとっているのを感じる。

マサコン登頂四十周年を迎えて、そして高齢者となってなお、いまだに「人生は『やるか、やらないか』だぞ！」と自分に言い聞かせて今日このごろを生きている。

マサコンから40年、思い出すこと

横山宏太郎

1985年秋のマサコン登山から40年以上が経った。ブータンで、国内で、多くの方のお世話になってマサコンに初登頂することができたことにまずお礼申し上げたい。

私としては、隊に誘ってくれた人たちへの感謝は今も変わらない。たしか人見五郎ハイガさん（隊事務局長）が連絡してくれたと思う。1981年のチベット偵察のあと職に就いたのでこれで当分ヒマラヤの機会はないと思っていたところで、うれしかった。

そのハイガさんと隊長の堀先生がおられないのは残念だが、83〜85年で連絡の取れるメンバーはそれぞれ各方面で活躍しており昨年秋には京都で集まることができたのはうれしいことだった。

また、その際に、竹田晋也、高井正成ふたりの京大教授により関連の会合が計画され、10月12日には「京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊1983〜1985の研究資源アーカイブ化作業」の経過報告会が、翌13日にはヒマラヤ研究ユニット主催の研究会「マサコンから40年:ブータン研究の軌跡と展望」が開催された。本号にそれぞれ報告がある。私は列車の都合で13日は中座してしまったが、40年を経て、京都大学のブータン研究と交流の発展や資料等の活用が継続していることを喜びながら帰途についた。

思えば40年前は、ほかのことは忘れたりあえて意識の外に置いたりしてひたすらにマサコンに集中していたのだった。マサコンや山登りについて思い出すことを、この機会にいくつか書いてみたい。

臆病者の山登り

表題の通り、私は臆病者、怖がりである。心配性であるともいえる。はたから見ると、あるいは好意的な言い方なら、慎重といえるかもしれない。

なににつけても痛いのはいやだ。ダイコンおろしをするときは、ダイコンが小さくなってくると手までおろしやしないかと心配で、そこいらがむずむずする。

だから、山で必要になるかもしれないものを持っていないと心配なので、持っていく。そのために個人装備が重くなる。持って行っても使わないで持ち帰ることが多い。使わずに済んでよかった、と思うようにしているが、最近はかなり減らしている。登山の最中でも、恐がりである。ルートのとり方や、キャンプ地の選定では、恐いことは避けておきたい。そのため、同回生には「ジッヘルのコータロー」「個装のコータロー」と言われたこともある。誉め言葉ではなく、ちょっと度が過ぎるのじゃないか、という意味をこめての呼び方である。

そんなに恐いなら山登りをしなければよいのに、と言われそうだが、恐いけれども山登りはしたい。

なぜこんなことを書き始めたかというと、最近になって、ふと、梅里雪山で逝った広瀬顕君の追悼を開いたところ、以下の文を見つけて驚いたからだ。

『氷河下端の段差に雪が積もったところを横山トップで横切り、右端で1段15 mほど高みへ登る。トップの横山は雪をかきわけ、氷壁にバイルをたたき込み登ってしまう。そこは集まってみると、割れはがれた氷柱がドミノのように上から並び、その間を縫って登れないことはないが、登りたいとは思わないし、今後、何人もの隊員が何度も安全に通過できるとは思えない。そんなところへ躊躇なく登ってゆく横山という人は過激な人であろうか。(追悼　廣瀬顕、89ページ)』

梅里雪山の第一次隊（1989年）で、氷河上に設営したキャンプから、氷河上部の偵察をしていたころの話である。私のことを、勇猛果敢な登攀隊長で、危険なところにも迷わず突進してルートを切り開いて行く、そんな人物と思われていたとすればそれは大いなる誤解というものだ。そのことを廣瀬君に伝えられないのは残念だが、ほかにも誤解している人がいるやもしれず、せめてこの機会にその誤解を解いておきたいと思ったのである。

誤解が生まれた原因として思い当たることのひとつは、私が雪の斜面にはわりと自信を持っていたことがあるかと思う。たぶん、スキーの経験から雪の斜面に慣れていたからだろう。だれも知っていることと思うが、傾斜を恐がると腰が引けてうまく歩けない。これはスキーでも同じだ。そうならずに、まっすぐ立てればうまくいく。1回生の11月、蒲田川右股でのアイゼン合宿ではじめてアイゼンというものを履いてみた。門田の8本爪である。そのときに指導役の上級生から褒められたのが自信になった。急傾斜の雪面にアイゼンがしっかり効いて立っているときは気持ちがよい。もちろん雪の状態次第であるが、11月後半、北鎌尾根の稜線に出る直前の雪面がほんとうに気持ちよかった。その記憶はいまもよみがえるけれど、しだいに自分に都合よく脚色している可能性無きにしも非ずではある。

そんなわけで、雪の急斜面に対する感覚は他の人とは少し違っていたのかもしれない。それ以外では、岩登りは、有名ルートの八ッ峰六峰Dフェースとかチンネ左稜線は登ったけれど、得意ではなかったし、あまり登山者として優れたところもない、臆病な登山者だったのである。

臆病だから、少しでも簡単な、安全そうなルートを登りたい。だから、偵察ではぐるっとひとまわり、あらゆる方向から見て、いちばん簡単そうなルートを選ぶべきだ、と思ってきた。未踏峰の登山では当然ともいえる。実際には、ぐるっとひとまわり、はなかなか実現できない。国境が邪魔をすることが多い。その場合は、接近できる側からいくしかない。制限の中で、最善なルートを選ぶ。

廣瀬君の文章のとおり、梅里雪山では、氷河の状態が悪く行き詰った。日数も足らず、撤退を決めた。できれば、氷河上流部を俯瞰できるポイントに立って、ルートを考えるべきだった。見えていた範囲から推測するに、よいルートが見つかった可能性は低いと思う。それでも、出来るだけのことをしなかったという悔いはのこっている。

マサコンでは、キャンプを移動させたことが

あった。ずっと遠くにある氷塊が崩れ落ちたら、と心配になり、その影響が及ばないように、想定される流路から離れるように移動させた。隊員は言うことをきいて作業してくれたけれども、無意味な作業と思った人もいたかもしれない。梅里雪山では、頭上に氷塊が載っているルートを採らないことにした。不満に思った人もいただろう。雪氷を一応の専門にしているからだけが理由ではないが、氷河は動くもの、雪は落ちるもの、という考えがもとにある。これらの処置に意味があったのかどうか、今からではおそらくわからないだろう。

私が過度に恐れているだけかもしれない、という気持ちもある。それにつけて思うのは、クンブ氷河のことである。エベレスト（サガルマタ、チョモランマ）の初登ルートとなったのは、ネパール・クンブ氷河だった。頂上へ向かうには、まずそのアイスフォールを突破しなければならない。写真などで見たことしかないが、セラックの間を縫うようなルート、ハシゴなど資材を使ってルートを整備する。氷の動きは急で、ルートの状況は日に日に変わり、ルート補修は頻繁に行う必要がある。セラックの崩壊などにより、事故も数多い。

もし、私がこのクンブのアイスフォールを経験していたら、氷河での行動も違っていたかもしれない、と思う。経験が自分のなかで一つの基準になる。「クンブのアイスフォールに比べれば」と思って、もっと大胆に、厳しい状況のなかを強引にルートを付けていったかもしれない。

それによって、いくぶんかは頂上に近づいたであろう。しかしそれがよいか悪いかはわからない。簡単に引き下がらずに突破を試みる中で事故を起こしたかもしれない。

最終キャンプ

そんな臆病者のとった方法のひとつが、最終キャンプを出来るだけ高くあげること、だった。

京大のヒマラヤ登山では登頂時にビバークをしている例がいくつもある。思いつくところではノシャック、サルトロカンリでは隊員は無事戻ったが、ヤルンカン、K12 では遭難になった。また、私が参加した日本山岳会の 1980 年のチョモランマ登山隊の北東稜ルートでも 2 人が 8600 m でビバークしたが、翌日生還した。極地法（包囲法）登山だから、簡単に言えば、最終キャンプから頂上までが遠すぎた。高度差・距離が大きすぎたのである。登頂隊員やサポート隊員の超人的、英雄的ともいえる行動には敬服するが、そんな目には遭いたくない。こうなった原因はひとつではないとしても、最終キャンプをもっと頂上に近づけるのが有効な解決策であるのはあきらかである。

その考えのもと、マサコンではなるべく最終キャンプをあげたいと考えた。結果として、最終の第 3 キャンプから頂上までは約 3 時間だった。登頂後、充分の余裕をもって第 3 キャンプにもどり、さらに第 2 キャンプまで戻ることができた。第 3 キャンプから上のルートは比較的容易だったことも幸いした。また、第2・第3キャンプ間の困難な氷壁には、しっかりとルート工作が出来ていた（それでも通過するのは恐かった）。

隊として、それだけのことをする力があった、ルートを開き、工作をして、物資を運び、キャンプを作る、隊全員の力を結集して、このような登山、安全確実な登頂ができたのだと思う。それはよしとしても、登頂態勢を工夫すれば頂上に向かう人はさらに増やせたのではないか、という悔いが私の中にはある。登攀隊長としての思考に柔軟性が足りなかったのだろう。

ヤク肉事件の反省

いまとなっては半ば笑い話のようでもある「ヤク肉事件」であるが、このために登攀の進み具合が何日か遅れたことは間違いない。これがもとになって登頂ができなかったりしたら、恥ずかしくて世間に顔向けできないところだった。

ヤルンカン隊でも同様の事件があったことを後日知った。

『ツェラムでヤクを買って屠殺し、その昼は舌やミノの刺身、センマイの味噌あえ、夜はステーキ、翌日の昼はローストヤクと食べ続けたら、夕方よりおかしくなり始め、ひどい下痢、腹痛が 3 人、下痢だけが 4 人と全員がのびてしまった。抗生剤、整腸剤で治療し、一日で全員回復した。

（登頂後に再度ツェラムで挑戦したときは）

包丁、まな板は熱湯でよく洗い、舌やミノは湯引きして食べたら、一人も下痢をしなかった。

不潔な包丁やまな板についた細菌による食中毒であったと考えられる。』

報告書「ヤルンカン」p110、医療・高所医学報告のなかにある記述だ。「文責・齊藤(惇生)」とある。

ヤルンカンの報告はもちろん読んでいるが、登頂前後のドラマに関心が向いて、このあたりは読んでいなかったか、それとも読んでも忘れていたのか。マサコンの時には頭になかった。

何度も行ったネパールでは、さまざまな料理を楽しんでいたし、隊で買ったヤギを料理したこともある。そんなことから警戒心がうすれていて、この点については「臆病」になれなかった。不勉強を反省している。

隊長・堀了平先生と人見ハイガ事務局長

堀先生が逝去されたのはほんとうに残念なことだった（2023 年 2 月 2 日）。 私にとって、隊にとって、まことにありがたい隊長であった、と今も思う。

1984 年 11 月、登山許可を得るために訪れたブータン、ドチュラで先生はマサコンと対面する。

『首府ティンプーの近くにあるドチュラという峠からのブータン・ヒマラヤのパノラマでひときわ目立つ独立峰がマサ･コン峰で 7200 メートルです。一目ぼれといいますか、この山にこそわれわれの夢を実現したいと心に決めまして、いよいよ登山許可の交渉に入ったわけです。(そして交渉の結果)

最終的には大臣からファースト・プライオリティを京大隊にやろうという言葉をいただきました。これは生涯でもなかなか忘れがたい感激の日でありました（堀了平教授停年退官記念誌

写真 1　1984 年 11 月、堀先生とともにドチュラから眺めたマサコン

写真 2　2005 年 12 月 20 日、ドチュラからのマサコン

写真 3　マサコンとの再会（2005 年 12 月 20 日）

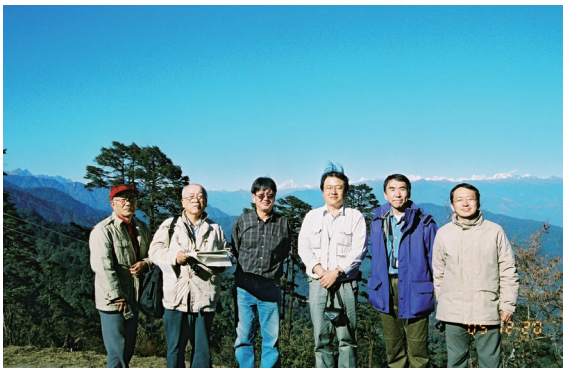


写真 4　マサコンをバックに 左から新井浩、栗田靖之、人見五郎、月原敏博、横山宏太郎、竹田晋也　マサコンは人見と月原の間に見える（2005 年 12 月 20 日）

より)』

忙しい公務をやりくりして、全期間を登山隊とともに過ごしてくださったのは、このお気持ちのゆえであろう。そこに私の理解が及ばなかったことは追悼文（下記）に反省を述べたとおりである。

今回、40 周年の原稿を募集したが、思ったほどには集まらなかった。少し前に、堀先生追悼特集号（110 号）があり、そこに力を注いだ人が多かったためではないか、と推測している。私たちにとって堀先生の存在がいかに大きかったかを示すことでもあろう。

20 周年の 2005 年に、隊員・関係者がブータンを訪問し、マサコンと、またブータン側関係者と再会をはたした。堀先生は体調への不安から参加されなかったのは残念なことだったが、この旅は、栗田靖之（ラーメン）副隊長と月原敏博（ベコ）さんの二人の名ガイドのおかげで、ほんとうに楽しい旅だった。もう一人、人見ハイガさんもいつもの通り、まわりを明るくし、楽しさをさらに増してくれたことも思い出す。今確かめたところハイガさんは 2011 年 9 月 24 日という早すぎる逝去、この旅から 6 年後のことだった。彼への感謝は Newsletter60 号の追悼文に書いたので繰り返さないが、冒頭の件を含めいまも忘れずにいる。

マサコンから 40 年、堀先生と人見ハイガさんのご冥福をあらためて祈りながらあの日々を思い出している。

図書紹介

「主要電源としての自然エネルギー」

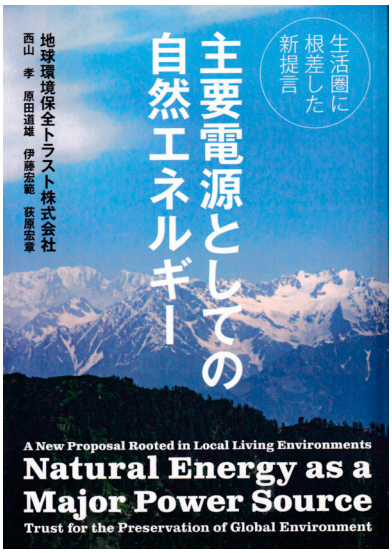
西山孝、原田道雄、伊藤宏範、荻原宏章著

地球環境保全トラスト株式会社　2025 年 8 月 31 日発行　110 頁

ISBN: 9784991329692

永田龍

2026 年 2 月 28 日、トランプとネタニヤフがイランへの攻撃を開始した。すぐにホルムズ海峡は事実上閉鎖となりガソリン価格はたちまち暴騰、一時、1L あたり 200 円を超えようとしていた。国の補助金と備蓄石油の放出により今は 1L あたり 170 円程度に落ち着いているが攻撃前よりは 20 円は高い。戦争の終結は当面期待できず、電気代、ガス代等のエネルギー価格の高騰は時間の問題と思われる。エネルギー価格の高騰だけで済めばまだしも、日本に入る石油の 90% 以上がホルムズ海峡を通過している状況を考えると、石油そのものが日本に入って来なくなる事態もありうる。



このような危機的状況が迫っている中、地球

環境保全トラスト株式会社の本会会員西山孝氏らによって「主要電源としての自然エネルギー」なる著作が昨年出版された。この著作は、そもそも石油危機を想定して記されたものではなく、化石燃料を消費することによるCO_2の排出とそれに伴う地球温暖化の防止を論じた「生活圏に根差した新提言」である。しかしながら、主に中東地域の化石燃料の消費に頼る日本の現代社会に警鐘を鳴らす上でもタイムリーな著作と言える。

西山氏はまず1章で化石燃料の消費が限界に達しつつあるとする一方で、自然エネルギーの代表格である太陽光発電が発電コストの面で既存の大型火力発電と遜色なく、十分競争力のあるものとしながらも､そのデメリットを挙げる。すなわち、エネルギー密度が希薄であること、既存の送電設備に適合していないこと、発電が日照に左右されることからベースロード電源には適さないことである。2章では、改めて自然エネルギーとして、太陽光、バイオマス、風力、地熱、水力発電を挙げ、詳細なデータを示しつつそれらのメリット、デメリットを論じる。3章では地球温暖化と地球環境破壊が化石エネルギー消費と密接に関わっていることをデータを示し論じる。

こうした論点を踏まえ、西山氏は4、5章である提言を行う。迷惑のかからない再生可能エネルギーの創出である。では具体的にはどうするか。里山里地を利用した、ローカルに必要とする量をローカルに発電し消費することができる再生可能エネルギーの開発である。地域に根付いたものであれば環境破壊を誘発する大規模な発電設備も送電設備も必要としない。電力均一化には蓄電機能を持たせることが重要であるが、水力発電がこれを代替することができる。6章では具体的に著者の関わりのある2町1市にある里山里地を例に挙げ実現が可能であることを証明する。実際に4パターン(プランA―D)のそれぞれ導水管で結ばれた上池､下池を使い、日中は小規模太陽光発電による余剰電力を利用して下池から上池に揚水し、夜間の電力需要の高い間は水力発電によって電力供給を行う。綿密な計算を行ったうえでいずれのパターンも採算が取れるとする。特に滋賀県日野町の丘陵地にあるかんがい用ダムを上池、高度差100 m下の防災ダムを下池とし、さらにそれらの中間にある2つの小さなかんがい池も含めてこれらを導水管で結び、下流の3つの池に1000kw程度の発電機を配置するプランAでは年間の総発電量は900万kwと計算され、十分に採算が取れるとする。

この著作の巻頭に、会員谷泰氏が推薦の言葉を書いておられる。読者の方には是非この一文を読んでいただきたい。谷氏は京都大学学士山岳会会員として山々の自然の豊かさ、美しさを享受してこられた。暴力的な気候変動によって山々の自然が荒れ、破局に向かう流れに歯止めをかけたいとの谷氏の願いがひしひしと伝わる。

最後に、あとがきとして、会員原田道雄氏は述べる。パイオニアワークを源流とする京都大学山岳部出身の私たちは新しい流れを作り始めようとしていると。

事務局だより

8月26日夜、チベットとカトマンズを結ぶ交易路を襲った大洪水の衝撃的な映像が飛び込んできた。チベットのギーロンから約100㎞にわたってトリシュリ川沿いに点在する集落が破壊された。9月7日現在、すでに1000人以上の死亡と数千人の行方不明者が確認されている。私も1990年にシシャパンマ峰ベースキャンプからカトマンズに向けてバスでこの領域を通過した。ギーロンからランタンリルン峰を挟んで約100km東にある､その当時のメインルートだったザンム―経由だった。深い渓谷のはるか上につけられた未舗装道路を延々と丸1日かけて走り続けたことを記憶している。今回の大洪水はランタンリルン峰中腹の5200 m付近の岩盤の崩壊が引き金となったとされているが、その原因について、京大山岳部ＯＢで弊会とも関係が深く40年に渡って氷河研究を続けている名古屋大学藤田耕史教授がテレビ番組で見解を述べている。氷河の融解水が岩盤にある割れ目に浸み込んで、それが岩盤崩壊を引き起こした可能性が選択肢の一つとして考えられる、た

だし、それだけではあれだけの水量を説明できず、膨大な水が何に由来するのか明らかにすることが今後の研究課題となると。氷河の融解は昨今の地球温暖化によることは明らかで、ネパール首相は温暖化ガス主要排出国であるアメリカ、中国、インドに対して今回の大災害に対する補償を求めている。

日本では、この夏レベル５の大雨警報が頻発しており、各地で甚大な浸水被害が相次いでいる。私も９月５日に福井市付近の北陸自動車道を走行中、たわわに実った稲穂が浸水によってなぎ倒されている光景をあちこちで目撃した。素人目にも、地球温暖化によって海水温が上昇して大気中に大量の水蒸気が放出され、それが大雨の供給源となっていると理解できる。

本号では弊会会員西山孝氏らによる「主要電源としての自然エネルギー」と題した著作が紹介されている。まさしく、昨今の温暖化に警鐘を鳴らし、その解決策の一つを提唱したものである。皆様には、是非一読をお願いしたい。

本号はマサコン初登頂 40 周年特集号となっている。これ以降、京大山岳部・AACK の海外遠征でヒマラヤの高峰に初登頂を記録したものはない。梅里雪山の記憶とともに時代の移り変わりを感じる。

会員動向

訃報

山田和人 2026 年 9 月 19 日逝去

会員異動

谷本　陸　　自宅住所変更
大村　誠　　自宅住所変更
佐藤攻太郎　自宅住所変更
中田聡輝　　自宅住所変更

入会

坂井明日風
池崎温大

編集後記

たいへん遅くなりましたが 116 号をお届けします。マサコン 40 周年特集です。ブータンのマサコン峰初登頂は 1985 年 10 月ですから、41 年が経ってしまいました。編集の遅れお詫びいたします。

1985 年の最も大きな出来事は日航 123 便の墜落事故ではないでしょうか。マサコン隊の本隊はその少し後に日本を出発するのですが、先発隊としてカルカッタ（コルカタ）にいた私は、地図の閲覧や購入のため月原さんと訪れたインド測量局でスタッフから事故のことを聞き、現地の英字新聞の記事を見て驚きました。とはいえ小さな記事（第一報だったのかもしれません）の限られた情報では、事故の大変さを充分には理解できていなかったように思います。いまならすぐにインターネット経由で詳しい情報が手にはいることでしょう。

もうひとつの「大事件」は阪神タイガーズの 21 年ぶりのリーグ優勝、日本一でしょう。登頂記では、10 月 1 日にマジックナンバーが 8 になったとあります（リーグ戦の日程がいまとは違います）。そして 16 日、無事登頂を終えて全員が ABC に帰着した日の夕方に、ラジオ日本によりリーグ優勝が伝えられた、とのことです。これも時代を感じさせます。

40 年目の昨年はリーグ優勝でした。これを書いている 9 月 26 日にマジックナンバーは 4 になりました。さて 41 年目はどうなるでしょう（10 月 3 日に連覇達成）。

原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2026 年 10 月 15 日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　幸島司郎
発行所　〒 606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学総合博物館　　高井正成　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町 1-8
㈱土倉事務所